若菜集

島崎藤村

明治三〇年

こゝろなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる
むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさけに
かげにおくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり
あぢはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき
うたゝねのゆめのそらごと

明治二十九年の秋より三十年の春へかけてこゝろみし根無草の色も香もなきをとりあつめて若菜集とはいふなり、このふみの世にいづべき日は青葉のかげ深きころになりぬとも、そは自然のうへにこそあれ、吾歌はまだ萠出しまゝの若菜なるをや。

深林の遥遥

（百七十九頁參照）

小川一眞製

目次

おえふ……1
おきぬ……7
おさよ……10
おくめ……17
おつた……22
おきく……27
明星……34
草枕……37
潮音……49
春の歌……50
新暁……53
若水……54
春の歌……57
佐保姫……61
春の曲……65
醉歌……67
二つの聲……71
白壁……75
四つの袖……76
暗香……79
蓮花舟……87
葡萄の樹のかげ……94

高楼……100
天馬……107
哀歌……125
母を葬るのうた……133
梭（をさ）の音（ね）……137
かもめ……139
流星……140
夏の夜……141
晝の夢……143
東西南北……146
懐古……147
秋のうた……152
初戀……154
狐のわざ……156
相思……157
一得一失……159
傘のうち……161
ゑにし……164
知るや君……164
秋風の歌……166
雲のゆくへ……171
逃げ水……172
月光……176
强敵……178
別離……181
望郷……185

葡萄栗鼠（きねづみ）の木彫を観て……187
鶏……189
深林の逍遙……202

若菜集

島崎藤村著

おえふ

處女(をとめ)ぞ經(へ)ぬるおほかたの
われは夢路(ゆめぢ)を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河(やまかは)をながむれば
水靜(みづしづ)かなる江戸川の

ながれの岸にうまれいで
岸の櫻の花影(はなかげ)に
われは處女(をとめ)となりにけり

都鳥(みやこどりう)浮く大川(おほかわ)に
流れてそゝぐ川添(かはぞひ)の
白菫(しろすみれ)さく若草(わかぐさ)に
夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重(こゝのへ)の
大宮内につかへして
清涼殿(せいりょうでん)の春の夜(よ)の
月の光に照らされつ
雲を彫(ちりば)め濤(なみ)を刻(ほ)り

霞(かすみ)をうかべ日をまねく
玉の臺(うてな)の欄干に
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の
耀(かがや)くさまを目にも見て
ときめきたまふさま〳〵の
ひとりのころもの香(か)をかげり

きらめき初(そ)むる曉星(あかぼし)の
あしたの空に動くごと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天(あま)つみそらを渡る日の

影かたぶけるごとくにて
名(な)の夕暮に消えて行く
秀(ひい)でし人の末路(はて)も見き

春ゑづかなる御園生(みそのふ)の
花に隠れて人を哭(な)き
秋のひかりの窻に倚(よ)り
夕雲(ゆふぐも)とほき友を戀ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門(かど)を出(い)で
けふ江戸川に來て見れば
秋はさみしきながめかな

櫻の霜葉(しもは)黄に落ちて

ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水靜（しづか）にて
あゆみは遲きわがおもひ

おのれも知らず世を經（ふ）れば
若き命（いのち）に絶へかねて
岸のほとりの草を藉（し）き
微笑（ほほゑ）みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲(あらわし)の
人の處女(をとめ)の身に落ちて
花の姿に宿(やど)かれば
風雨(あらし)に渇(かわ)き雲に饑(う)ゑ
天翅(あまかけ)るべき術(すべ)をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪(くろかみ)長き吾身こそ
うまれながらの盲目(めしひ)なれ

芙蓉(ふよう)を前(さき)の身とすれば
涙(なみだ)は秋の花の露
小琴(をごと)を前(さき)の身とすれば

愁(うれひ)は細き絲(いと)の音
いま前(さき)の世は鷲の身の
處女(をとめ)にあまる羽翼(つばさ)かな

あゝあるときは吾心
あらゆるものをなげうちて
世はあぢきなき淺茅生(あさぢふ)の
茂(しげ)れる宿(やど)と思ひなし
身は術(すべ)もなき蟋蟀(こほろぎ)の
夜(よる)の野草(のぐさ)にはひめぐり
たゞいたづらに音(ね)をたてて
うたをうたふと思ふかな

色(いろ)にわが身をあたふれば

處女(をとめ)のこゝろ鳥となり
戀に心をあたふれば
鳥の姿は處女(をとめ)にて
處女ながらも空の鳥
猛鷲(あらわし)ながら人の身の
天(あめ)と地(つち)とに迷ひゐる
身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮(うしほ)さみしき荒磯(あらいそ)の
巖陰(いはかげ)われは生れけり

あしたゆふべの白駒(しろごま)と
故郷(ふるさと)遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの

げに狂はしの身なるべき
この年までの處女(をとめ)とは

うれひは深く手もたゆく
むすぼゝれたるわが思(おもひ)

流れて熱(あつ)きわがなみだ
やすむときなきわがこゝろ

亂(みだ)れてものに狂ひよる
心を笛の音(ね)に吹かん

笛をとる手は火にもえて
うちふるひけり十(とほ)の指

音(ね)にこそ渇(かわ)け口唇(くちびる)の
笛を尋(たづ)ぬる風情(ふぜい)あり

はげしく深きためいきに
笛の小竹(をだけ)や曇るらん

髪は亂れて落つるとも
まづ吹き入るゝ氣息(いき)を聽(き)け

力をこめし一ふしに
黄楊(つげ)のさし櫛(ぐし)落ちてけり

吹けば流るゝ流るれば
笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節(ふし)の間(ま)も

長き思(おもひ)のなからずや

七つの情(こころ)聲を得て
音(ね)をこそきかめ歌神(うたがみ)も

われ喜(よろこび)を吹くときは
鳥も梢(こずゑ)に音(ね)をとゞめ

怒(いかり)をわれの吹くときは
瀬(せ)を行く魚も淵(ふち)にあり

われ哀(かなしみ)を吹くときは
獅子(しし)も涙をそゝぐらむ

われ樂(たのしみ)を吹くときは
虫も鳴く音(ね)をやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち歸り

惡(にくみ)をわれの吹くときは
散り行く花も止(とどま)りて

慾(よく)の思(おもひ)を吹くときは
心の闇(やみ)の響(ひびき)あり

うたへ浮世(うきよ)の一ふしは
笛の夢路(ゆめぢ)のものぐるひ

くるしむなかれ吾友(わがとも)よ
ふばしは笛の音(ね)に歸れ

落つる涙をぬぐひきて
靜かにきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出(い)で
こゝの岸よりかの岸へ
越えましものと來て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親(おや)も捨てはてゝ
やむよしもなき胸の火や
鬢(びん)の毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし

河波(かはなみ)暗く瀬を早み
流れて巖(いは)に碎(くだ)くるも

君を思へば絶間なき
戀の火炎(ほのほ)に乾(かわ)くべし

きのふの雨の小休(をやみ)なく
水嵩(みかさ)や高くまさるとも
よひ〳〵になくわがこひの
涙の瀧におよばじな

ふりたまはずやわがこひは
花鳥(はなどり)の繪にあらじかし
空鏡(かゞみ)の印象(かたち)砂の文字
梢の風の音にあらじ

ふりたまはずやわがこひは
雄々(をゝ)しき君の手に觸れて
嗚呼(ああ) 口紅(くちべに)をその口に
君にうつさでやむべきや

戀は吾身の社(やしろ)にて
君は社の神なれば
君の祭壇(つくへ)の上ならで
なにゝいのちを捧(ささ)げまし

碎(くだ)かば碎け河波(かはなみ)よ
われに命はあるものを
河波高く泳ぎ行き
ひとりの神にこがれなむ

心のみかは手も足も
吾身はすべて火炎(ほのほ)なり
思ひ亂れて嗚呼戀の
千筋(ちすぢ)の髪の波に流るゝ

おつた

花仄見ゆる春の夜の
すがたに似たる吾命
朧々に父母は
二つの影と消えうせて
世に孤兒の吾身こそ
影より出でし影なれや
たすけもあらぬ今は身は
若き聖に救はれて
人なつかしき前髪の
處女とこそはなりにけれ
若き聖ののたまはく

時をし待たむ君ならば
かの柿の實をとるなかれ
かくいひたまふうれしさに
ことしの秋もはや深し
まづその秋を見よやとて
聖に柿をすゝむれば
その口唇（くちびる）にふれたまひ
かくも色よき柿ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく
人の命の惜（を）しからば
嗚呼（ああ）かの酒を飲むなかれ
かくいひたまふうれしさに

酒なぐさめの一つなり
まづその春を見よやとて
聖に酒をすゝむれば
夢の心地に醉ひたまひ
かくも樂しき酒ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖のゝたまはく
道行き急ぐ君ならば
迷ひの歌をきくなかれ
かくいひたまふうれしさに
歌も心の姿なり
まづその聲をきけやとて
一ふしうたひいでければ

聖は魂(たま)も醉ひたまひ
かくも樂しき歌ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖のゝたまはく
まことをさぐる吾身なり
道の迷(まよひ)となるなかれ
かくいひたまふうれしさに
情(なさけ)も道の一つなり
かゝる思(おもひ)を見よやとて
わがこの胸に指ざせば
聖は早く戀ひわたり
かくも樂しき戀ならば
などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ
そゞろあるきのこゝろなく
ふと目に入るを手にとれば
雪より白き小石なり
若き聖のゝたまはく
智恵の石とやこれぞこの
あまりに惜しき色なれば
人に隠して今も放(は)なたじ

おきく

くろかみながく
　　やはらかき
をんなごゝろを
　　たれかゑる

をとこのかたる
　　ことのはを
まことゝおもふ
　　ことなかれ

をとめごゝろの
　　あさくのみ

いひもつたふる
　　をかしさや

みだれてながき
　　鬢(びん)の毛を
黄楊(つげ)の小櫛(をぐし)に
　　かきあげよ

あゝ月(つき)ぐさの
　　きえぬべき
こひもするとは
　　たがことば

こひて死なんと

よみいでし
あつきなさけは
たがうたぞ
みちのためには
ちをながし
くにゝには死ぬる
をとこあり
治兵衛はいづれ
戀か名か
忠兵衛も名の
ために果(は)つ

あゝむかしより
こひ死にし
をとこのありと
ゑるや君

をんなごころは
いやさらに
ふかきなさけの
こもるかな

小春はこひに
ちをながし
梅川こひの
ために死ぬ

お七はこひの
ために焼け
高尾はこひの
ために果つ

かなしからずや
清姫は
蛇(へび)となれるも
こひゆゑに

やさしからずや
佐容姫(さよひめ)は
石となれるも

こひゆゑに
をとこのこひの
たはふれは
たびにすてゆく
なさけのみ

こひするなかれ
をとめごよ
かなしむなかれ
わがともよ

こひするときと
かなしみと

いづれかながき
いづれみじかき

明　星

浮べる雲と身をなして
あしたの空(そら)に出でざれば
などしるらめや明星の
光の色のくれなゐを

朝の潮(うしほ)と身をなして
流れて海に出でざれば
などゑるらめや明星の
清(す)みて哀(かな)しききらめきを

なにかこひしき曉星(あかぼし)の

空(むな)しき天(あま)の戸を出でて
深くも遠きほとりより
人の世近く來(きた)るとは

潮(うしほ)の朝のあさみどり
水底(みなそこ)深き白石を
星の光に透(す)かし見て
朝の齡(よはひ)を數ふべし

野の鳥ぞ啼(な)く山河(やまかは)も
ゆふべの夢をさめいでて
細く棚引(たなび)くゑのゝめの
姿をうつす朝ぼらけ

小夜(さよ)には小夜のふらべあり
朝には朝の音(ね)もあれど
星の光の絲の緒(を)に
あしたの琴(こと)は靜(しづか)なり

まだうら若き朝の空
きらめきわたる星のうち
いと〳〵若き光をば
名(なづ)けましかば明星と

草枕

夕波くらく啼(な)く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽(はね)をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋(ひとすぢ)に
なぐさめもなくなげきわび
胸の冰のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉(あしは)を洗ふ白波の

流れて巌(いは)を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋(たづ)ね侘(わ)び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや
野末(のずゑ)に山に谷蔭(たにかげ)に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想(おもひ)も薄く身も暗く
残れる秋の花を見て
行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲(あさぐも)にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨(ゆふあめ)にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄(ひるがへ)り
朝の黄雲(きぐも)にともなはれ
夜(よる)白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ亂れてみちのくの
宮城野(みやぎの)にまで迷ひきぬ

心の宿(やど)の宮城野よ
亂れて熱き吾(わが)身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴(こと)と聽(き)き
悲しみ深き吾目には

色彩(いろ)なき石も花と見き
あゝ孤獨(ひとりみ)の悲痛(かなしさ)を
味ひ知れる人ならで
誰(たれ)にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆(おほ)はれて
身にふりかゝる玉霰(たまあられ)
袖(そで)の冰と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁(つよ)く
小川の水の薄冰

冰のしたに音するは
流れて海に行く水か

啼(な)いて羽風(はかぜ)もたのもしく
雲に隠るゝかさゝぎよ
光もうすき寒空(さむぞら)の
汝(なれ)も荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の
光もなくて暮れ行けば
人めも草も枯れはてゝ
ひとりさまよふ吾身かな

かなしや醉ふて行く人の

踏めばくづるゝ霜柱
なにを醉ひ泣く忍び音(ね)に
聲もあはれのその歌は

うれしや物の音(ね)を彈(ひ)きて
野末をかよふ人の子よ
聲調(しらべ)ひく手も凍りはて
なに門(かど)づけの身の果(はて)ぞ

やさしや年もうら若く
まだ初戀のまじりなく
手に手をとりて行く人よ
なにを隱るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて
霜と霜との枯草の
道なき道をふみわけて
きたれば寒し冬の海

朝は海邊(うみべ)の石の上(へ)に
こしうちかけてふるさとの
都のかたを望めども
おとなふものは濤(なみ)ばかり

暮はさみしき荒磯(あらいそ)の
潮(うしほ)を染めし砂に伏し
日の入るかたをながむれど
湧(わ)きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の
岩に砕(くだ)けて散れるとき
かなしいかなや冬の日の
潮(うしほ)とともに歸るとき

誰(たれ)か波路を望み見て
そのふるさとを慕はざる
誰か潮の行くを見て
この人の世を惜(をし)まざる

暦(こよみ)もあらぬ荒磯の
砂路にひとりさまよへば
みぞれまじりの雨雲の

落ちて汐（うしほ）となりにけり

遠く湧きくる海の音
慣れてさみしき吾耳に
怪しやもるゝものの音（ね）は
まだうらわかき野路の鳥

嗚呼（ああ）めづらしのしらべぞと
聲のゆくへをたづぬれば
緑の羽（はね）もまだ弱き
それも初音（はつね）か鶯（うぐひす）の

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども

若菜の萠(も)えて色青き
こゝちこそすれ砂の上(へ)に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香(か)ぞする海の邊(べ)に

磯邊に高き大巖(おほいは)の
うへにのぼりてながむれば
春やきぬらん東雲(しのゝめ)の
潮(しほ)の音(ね)遠き朝ぼらけ

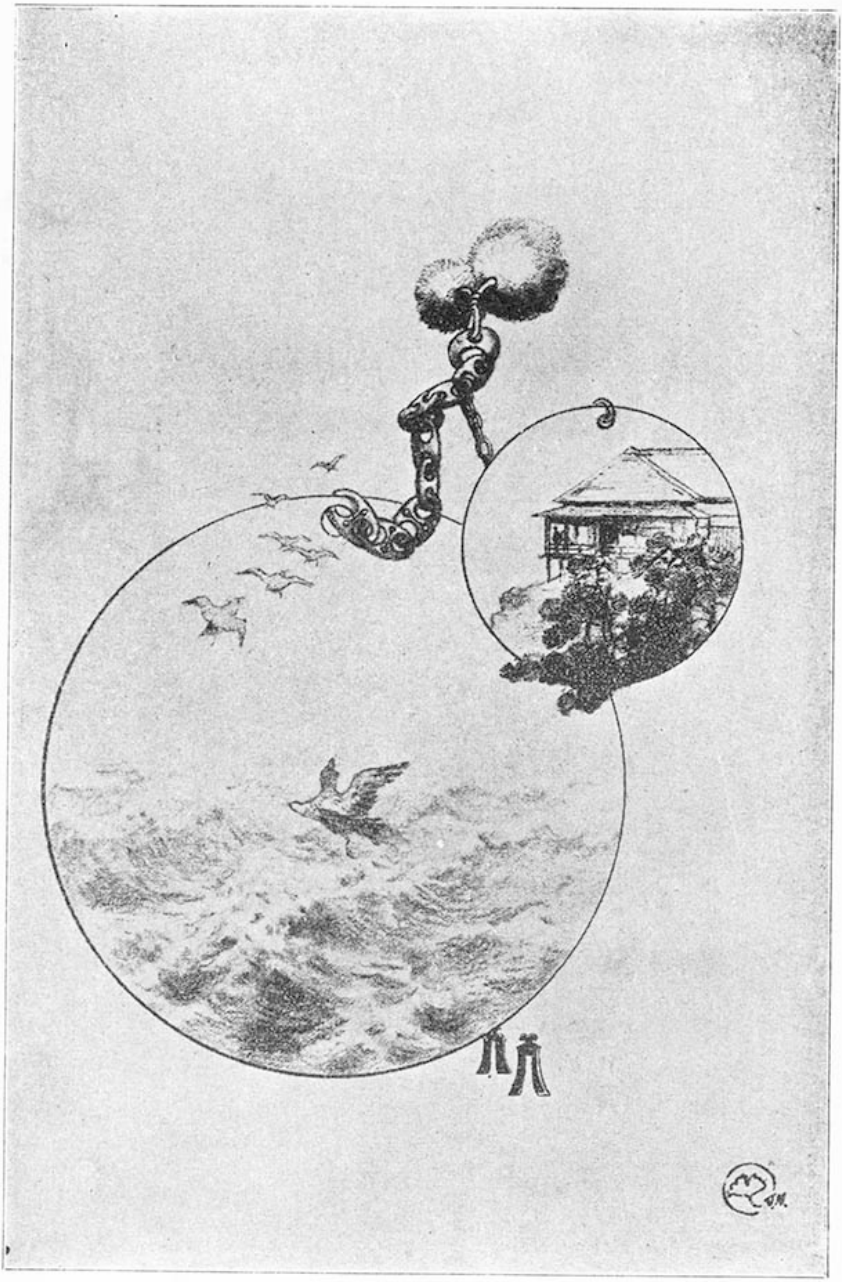
潮音

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
ゑらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば

うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

春の歌

たれかおもはん鶯の
涙もこほる冬の日に
若き命は春の夜の
花にうつろふ夢の間(ま)と
あゝよしさらば美酒(うまざけ)に
うたひあかさん春の夜を



梅のにほひにめぐりあふ
春を思へばひとゑれず
からくれなゐのかほばせに
流れてあつきなみだかな
あゝよしさらば花影に
うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて
おもひわづらふこゝろだに
春のすがたをとめくれば
たもとにゝほふ梅の花
あゝよしさらば琴の音に
うたひあかさん春の夜を

新　曉

紅（くれなひ）細くたなびける
雲とならばやあけぼのゝ
　　雲とならばや

やみを出でゝは光ある
空とならばやあけぼのゝ
　　空とならばや

春の光を彩れる
水とならばやあけぼのゝ
　　水とならばや

鳩に履まれてやわらかき
草とならばやあけぼのゝ
草とならばや

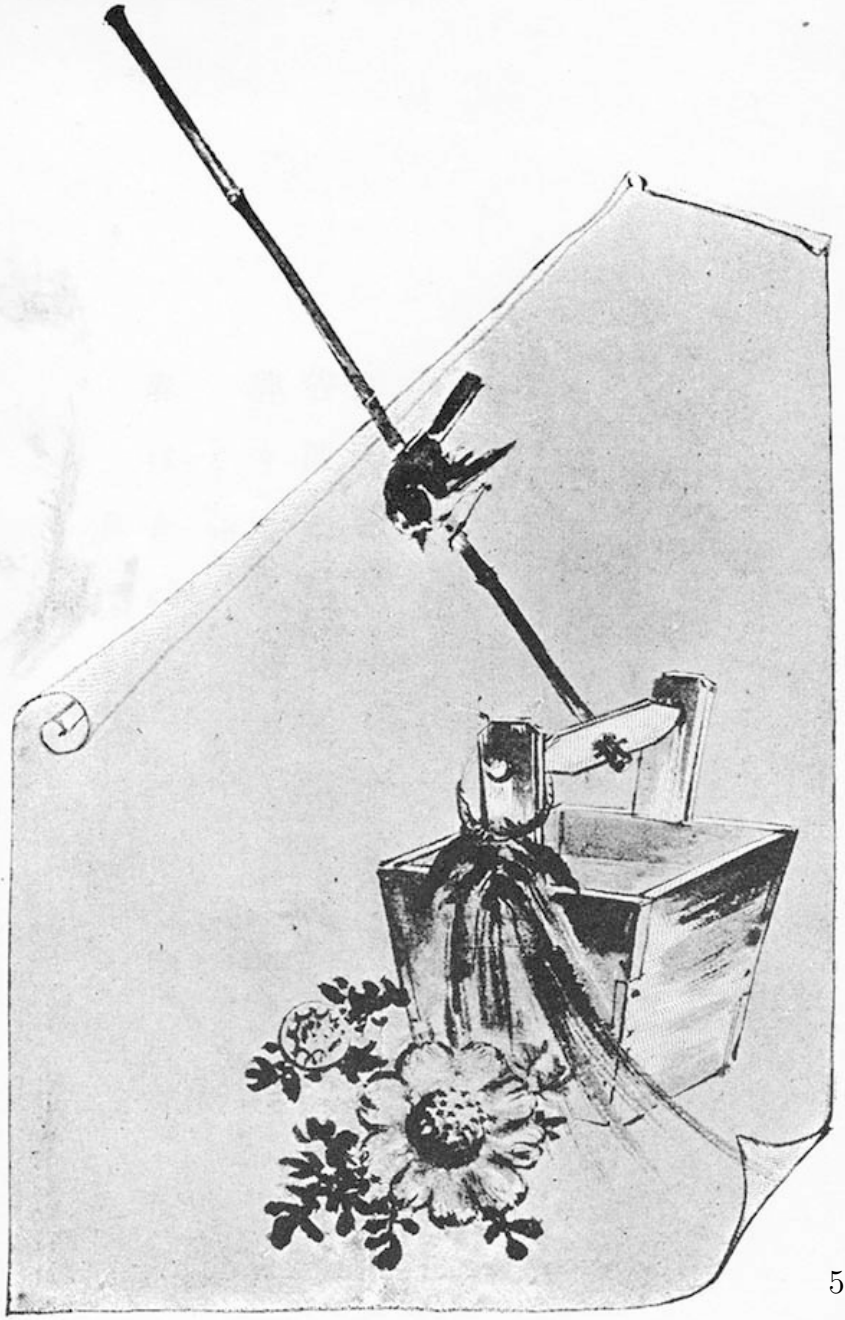
若水

くめどつきせぬ
わかみづを
きみとくまゝし
かのいづみ
かはきもゑらぬ

わかみづを
きみとのまゝし
かのいづみ

かのわかみづと
みをなして
はるのこゝろに
わきいでん

かのわかみづと
みをなして
きみとながれん
花のかげ



春の歌

春はきぬ
　春はきぬ
初音(はつね)やさしきうぐひすよ
こぞに別離(わかれ)を告げよかし
谷間に殘る白雪よ
葬りかくせ去歳(こぞ)の冬

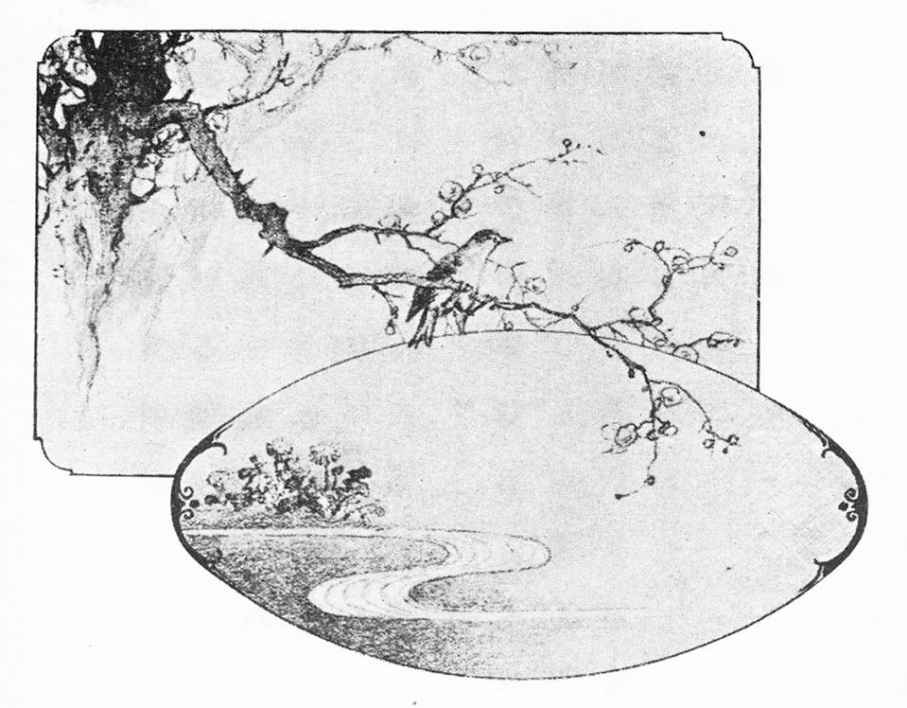
春はきぬ
　春はきぬ

さみしくさむくことばなく
まづしくくらくひかりなく
みにくゝおもくちからなく
かなしき冬よ行きねかし

春はきぬ

春はきぬ

淺みどりなる新草(にひぐさ)よ
とほき野面(のもせ)を畫(ゑが)けかし
さきては紅(あか)き春花(はるばな)よ
樹々(きぎ)の梢(こずゑ)を染めよかし



春はきぬ

春はきぬ

霞(かすみ)よ雲よ動(ゆる)ぎいで
冰れる空をあたゝめよ
花の香(か)おくる春風よ
眠れる山を吹きさませ

春はきぬ

春はきぬ

春をよせくる朝汐(あさじほ)よ
蘆(あし)の枯葉(かれは)を洗ひ去れ
霞に醉へる雛鶴(ひなづる)よ
若きあしたの空に飛べ

春はきぬ

春はきぬ

うれひの芹(せり)の根を絶えて
氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて
けふの若菜と萠(も)えよかし

佐保姫

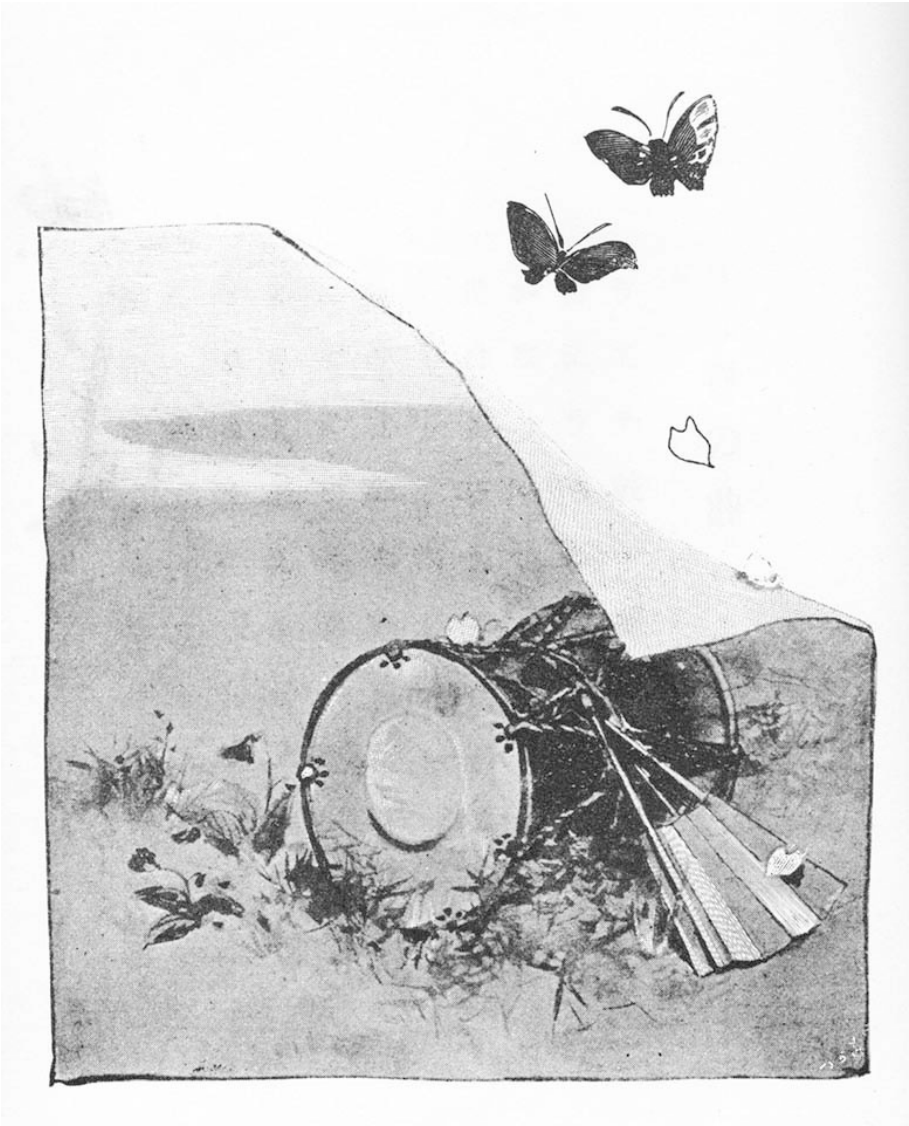
ねむれる春ようらわかき
かたちをかくすことなかれ

たれこめてのみけふの日を
なべてのひとのすぐすうち
さめての春のすがたこそ
まだ夢のまの風情(ふぜい)なれ

ねむげの春よさめよ春
さかしきひとのみざるまに
若紫の朝霞
かすみの袖(そで)をみにまとへ
はつねうれしきうぐひすの
鳥のゑらべをうたへかし

ねむげの春よさめよ春
ふゆのこほりにむすぼれし
ふるきゆめぢをさめいでゝ
やなぎのいとのみだれがみ
うめのはなぐしさしそへて
びんのみだれをかきあげよ

ねむげの春よさめよ春
あゆめばたにの早(さ)わらびの
ゑたもえいそぐ汝(な)があしを
たかくもあげよあゆめ春
たえなるはるのいきを吹き
こぞめの梅の香にゝほへ



春の曲

うてや鼓（つづみ）の春の音
雪にうもるゝ冬の日の
かなしき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞
かすみの幕をひきとぢて
花と花とをぬふ絲は
けさもえいでしあをやなぎ
霞のまくをひきあけて

春をうかゞふことなかれ
はなさきにほふ蔭をこそ
春の臺（うてな）といふべけれ

小蝶（こちょう）よ花にたはふれて
優しき夢をみては舞ひ
醉ふて羽袖（はそで）もひら〳〵と
はるの姿をまひねかし

緑のはねのうくひすよ
梅の花笠ぬひそへて
ゆめ靜なるはるの日の
ふらべを高く歌へかし

醉歌

旅と旅との君や我
君と我とのなかなれば
醉ふて袂(たもと)の歌草(うたぐさ)を
醒(さ)めての君に見せばやな

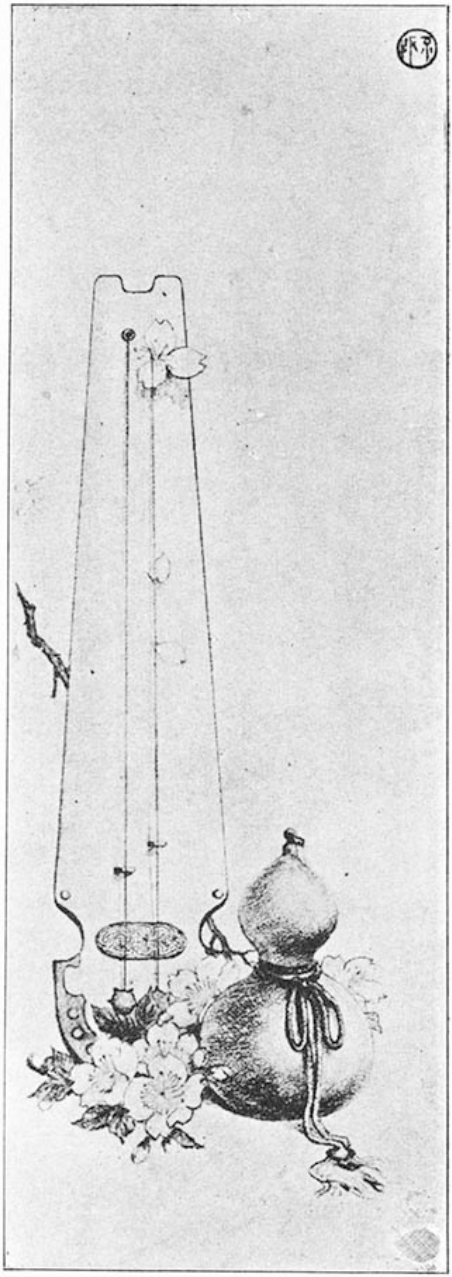
若き命も過ぎぬ間(ま)に
樂しき春は老いやすし
誰(た)が身にもてる寶(たから)ぞや
君くれなゐのかほばせは

君がまなこに涙あり

君が眉には憂愁(うれひ)あり
堅(かた)く結べるその口に
それ聲も無きなげきあり

名もなき道を說(と)くなかれ
名もなき旅を行くなかれ
甲斐(かひ)なきことをなげくより
來(きた)りて美(うま)き酒に泣け

光もあらぬ春の日の
獨りさみしきものぐるひ
悲しき味の世の智惠に
老いにけらしな旅人よ



心の春の燭火(ともしび)に
若き命を照らし見よ
さくまを待たで花散らば
哀(かな)しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く
君の行衛(ゆくへ)はいづこぞや
琴花酒(ことはなさけ)のあるものを
とゞまりたまへ旅人よ

二つの聲

朝

たれか聞くらん朝の聲
眠(ねむり)と夢を破りいで
彩(あや)なす雲にうちのりて
よろづの鳥に歌はれつ
天のかなたにあらはれて
東の空に光あり
そこに時(とき)あり始(はじめ)あり
そこに道あり力あり
そこに色あり詞(ことば)あり

そこに聲あり命あり
みそらにあがり地にかけり
のこんの星ともろともに
光のうちに朝ぞ隱るゝ

暮

たれか聞くらん暮の聲
霞の翼（つばさ）雲の帶
煙の衣（ころも）露の袖（そで）
つかれてなやむあらそひを
闇のかなたに投げ入れて
夜の使（つかひ）の蝙蝠の

飛ぶ間も聲のをやみなく
こゝに影あり迷(まよひ)あり
こゝに夢あり眠(ねむり)あり
こゝに闇あり休息(やすみ)あり
こゝに永(なが)きあり遠きあり
こゝに死ありとうたひつゝ
草木にいこひ野にあゆみ
かなたに落つる日とゝもに
色なき闇に暮ぞ隱るゝ

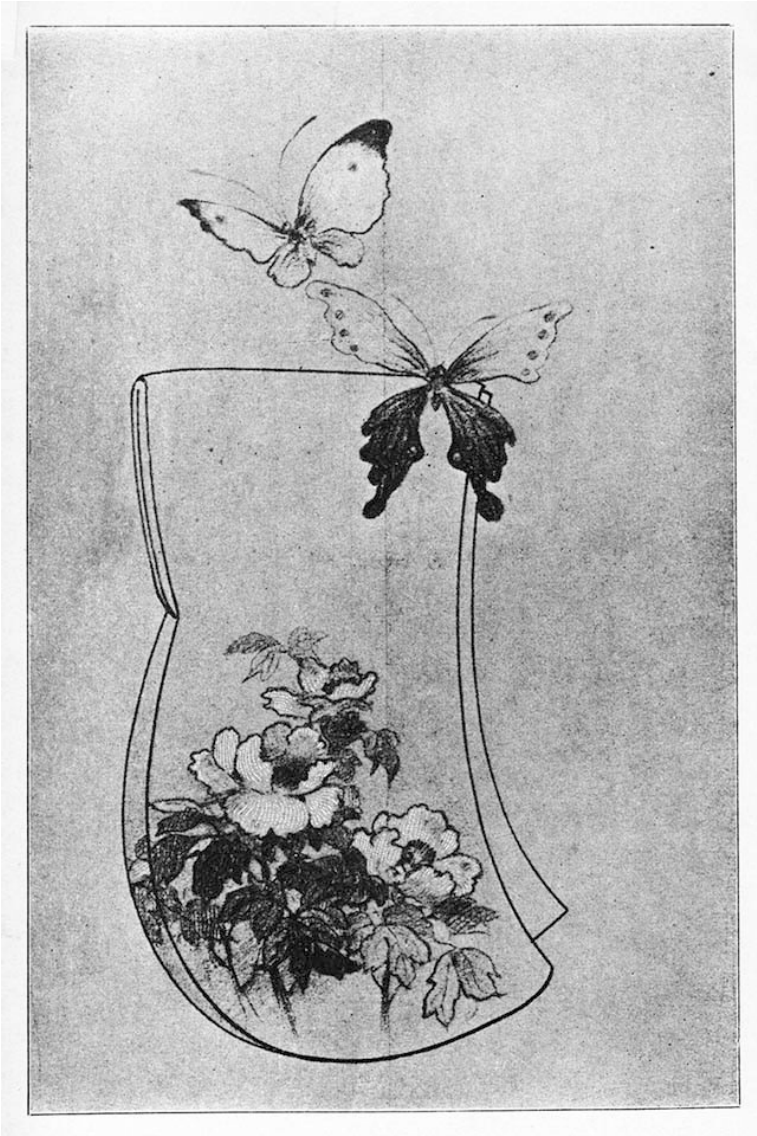
白壁（しらかべ）

たれかゑるらん花ちかき
高楼（たかどの）われはのぼりゆき
みだれて熱きくるしみを
うつしいでけり白壁に
唾（つば）にゑるせし文字なれば
ひとゑれずこそ乾きけれ
あゝあゝ白き白壁に
わがうれひありなみだあり

四つの袖(そで)

をとこの氣息(いき)のやはらかき
お夏の髪にかゝるとき
をとこの早きためいきの
霰(あられ)のごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌(ひら)の
お夏の手にも觸るゝとき
をとこの涙ながれいで
お夏の袖にかゝるとき



をとこの黒き目のいろの
お夏の胸に映るとき
をとこの紅(あか)き口唇(くちびる)の
お夏の口にもゆるとき

人こそゑらね嗚呼(あゝ)戀の
ふたりの身より流れいで
げにこがるれど慕へども
やむときもなき清十郎

暗香

はるのよはひかりはかりとおもひしを
ゑろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの
　をしければ
やみにもはるの
　香(か)に醉はん

せめてこよひは
　さほひめよ
はなさくかげに
　うたへかし

妹

そらもゑへりや
　はるのよは
ほしもかくれて
　みえわかず

よめにもそれと
　ほのゑろく
みだれてにほふ
　うめのはな

姉

はるのひかりの

こひしさに
かたちをかくす
うぐひすよ
はなさへしるき
はるのよの
やみをおそるゝ
ことなかれ

妹

うめをめぐりて
ゆくみづの
やみをながるゝ
せゝらぎや

ゆめもさそはぬ
香(か)なりせば
いづれかよるに
にほはまし

姉

こぞのこよひは
わがともの
うすこうばいの
そめごろも
ほかげにうつる
さかづきを

こひのみゑへる
よなりけり

妹

こぞのこよひは
わがともの
なみだをうつす
よのなごり

かげもかなしや
木下川（きねがは）に
うれひゑづみし
よなりけり

姉

こぞのこよひは
わがとものの
おもひハはるの
よのゆめや

よをうきものに
いでたまふ
ひとめをつゝむ
よなりけり

妹

こぞのこよひは
わがとものの

そでのかすみの
　　はなむしろ
ひくやことのね
　　たかじほを
うつしあはせし
　　よなりけり

姉

わがみぎのてに
　　くらぶれば
やさしきなれが
　　たなごころ

ふるればいとゞ
　　やはらかに
もゆるかあつく
　　おもほゆる

妹

もゆるやいかに
　　こよひはと
とひたまふこそ
　　うれしけれ

ゑりたまはずや
　　うめがかに
わがうまれてし

はるのよを

蓮花舟

ゑは〳〵もこほるゝつゆははちすはの
うきはにのみもたまりけるかな

姉

あゝはすのはな
はすのはな
かげはみえけり
いけみづに
ひとつのふねに
さをさして

うきはをわけて
　　こぎいでん

妹

かぜもすゞしや
　　はがくれに
そこにも〻ろし
　　はすのはな

こゝにもあかき
　　はすばなの
みづ〻づかなる
　　いけのおも

姉

はすをやさしみ
　　はなをとり
そでなひたしそ
　　いけみづに

ひとめもはぢよ
　　はなかげに
なれが乳房(ちぶさ)の
　　あらはるゝ

妹

ふかくもすめる
　　いけみづの

はにすれてゆく
　　みなれざを
なつぐもゆけば
　　かげみえて
はなよりはなを
　　わたるらし

姉

荷葉（はすは）にうたひ
　　ふねにのり
はなつみのする
　　なつのゆめ

はすのはなふね
　　さをとめて
なにをながむる
　　そのすがた

妹

なみゑづかなる
　　はなかげに
きみのかたちの
　　うつるかな

きみのかたちと
　　なつばなと
いづれうるはし

いづれやさしき

葡萄(ぶどう)の樹(き)のかげ

はるあきにおもひみたれてわきかねつ
ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや
　はなやかに
あきはいりひの
　てらすとき

たのしからずや
　ぶだうばの
はごしにくもの
　かよふとき

姉

やさしからずや
　　むらさきの
ぶだうのふさの
　　かゝるとき

やさしからずや
　　にひぼしの
ぶだうのたまに
　　うつるとき

妹

かぜはゑづかに

そらすみて
あきはたのしき
ゆふまぐれ
いつまでわかき
をとめごの
たのしきゆめの
われらぞや

姉

あきのぶだうの
きのかげの
いかにやさしく
ふかくとも

てにてをとりて
　　かげをふむ
なれとわかれて
　　なにかせむ

姉

げにやかひなき
　　くりごとも
ぶだうにゑかじ
　　ひとふさの

われにあたへよ
　　ひとふさを
そこにかゝれる
　　むらさきの

姉

われをゑれかし
　　えだたかみ
とゞかじものを
　　かのふさは

はかげのたまに
　　てはふれて
わがさしぐしの

おちにけるかな

高樓（たかどの）

わかれゆくひとをおしむとこよひより
とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに
たえかねて
このたかどのに
のぼるかな
かなしむなかれ
わがあねよ

たびのころもを
　　とゝのへよ

姉

わかれといへば
　　むかしより
このひとのよの
　　つねなるを

ながるゝみづを
　　ながむれば
ゆめはづかしき
　　なみだかな

妹

ゑたへるひとの
もとにゆく
きみのうへこそ
たのしけれ

ふゆやまこえて
きみゆかば
なにをひかりの
わがみぞや

姉

あゝはなとりの
いろにつけ

ぬにつけわれを
おもへかし
けふわかれては
いつかまた
あひみるまでの
いのちかも

妹

きみがさやけき
めのいろも
きみくれなゐの
くちびるも

きみがみどりの
　　くろかみも
またいつかみん
　　このわかれ

姉

なれがやさしき
　　なぐさめも
なれがたのしき
　　うたごゑも

なれがこゝろの
　　ことのねも
またいつきかん

このわかれ

妹

きみのゆくべき
やまかはゝ
おつるなみだに
みえわかず

そでのゑぐれの
ふゆのひに
きみにおくらん
はなもがな

姉

そでにおほへる
　　うるはしき
ながかほばせを
　　あげよかし
ながくれなゐの
　　かほばせに
ながるゝなみだ
　　われはぬぐはん

天馬

序

老(おい)は若(わかき)は越(こ)しかたに
文(ふみ)に照らせどまれらなる
奇(く)しきためしは箱根山
弥生(やよひ)の末のゆふまぐれ
南の天(あま)の戸(と)をいでて
よな〳〵北の宿に行く
血の深紅(くれなゐ)の星の影
かたくなゝりし男さへ
星の光を眼に見ては
身にふりかゝる凶禍(まがごと)の

天の兆(しるし)　とうたがへり
總鳴(そうなき)に鳴く鶯(うぐひす)　の
にほひいでたる聲をあげ
さへづり狂ふ音(ね)をきけば
げにめづらしき春の歌
春を得知らぬ處女(をとめ)さへ
かのうぐひすのひとこゑに
枕の紙のしめりきて
人なつかしきおもひあり
まだ時ならぬ白百合の
籬(まがき)の陰にさける見て
九十九(つくも)の翁(おきな)　うつし世の
こゝろの慾の夢を戀ひ
音(ね)をだにきかぬ雛鶴(ひなづる)の

軒の榎樹に來て鳴けば
寢覺の老嫗後の世の
花の臺に泣きまどふ
空にかゝれる星のいろ
春さきかへる夏花や
是わざはひにあらずして
よしや兆といへるあり
なにを醉ひ鳴く春鳥よ
なにを告げくる鶴の聲
それ鳥の音にト ひて
よろこびありと祝ふあり
高き聖のこの村に
聲をあげさせたまふらん
世を傾けむ麗人の

茂れる賤(しづ)の春草(はるぐさ)に
いでたまふかとのゝしれど
誰かゑるらん新星(にひぼし)の
まことの北をさしゝめし
さみしき蘆(あし)の湖(みづうみ)の
沈める水に映(う)つるとき
名もなき賤の片びさし
春の夜風の音を絶え
村の南のかたほとり
その夜生れし牝(め)の馬は
流るゝ水の藍染(あゐぞめ)の
青毛(あをげ)やさしき姿なり
北に生れし雄(を)の馬の
栗毛にまじる紫は

色あけぼのの春霞
光をまとふ風情(ふぜい)あり
星のひかりもをさまりて
噂(うはさ)に殘る鶴の音や
啼く鶯に花ちれば
嗚呼この村に生れてし
馬のありとや問ふ人もなし

雄馬

あな天雲(あまぐも)にともなはれ
緑の髪をうちふるひ
雄馬(をうま)は人に随(したが)ひて
箱根の嶺(みね)を下(くだ)りけり

胸は踴(をど)りて八百潮(やほじほ)の
かの蒼溟(わだつみ)に湧くごとく
喉(のど)はよせくる春濤(はるなみ)を
飲めども渇(かわ)く風情あり
目はひさかたの朝の星
睫毛(まつげ)は草の淺緑(あさみどり)
うるほひ光る眼瞳(ひとみ)には
千里(ちさと)の外(ほか)もほがらにて
東に照らし西に入る
天つみそらを渡る日の
朝日夕日の行衛(ゆくへ)さへ
雲の絶間に極むらん
二つの耳をたとふれば
いと幽(かすか)なる朝風に

そよげる草の葉のごとく
蹄(ひづめ)の音をたとふれば
紫金(しこん)の色のやきがねを
高くも叩(たた)く響あり
狂へば長き鬣(たてがみ)の
うちふりうちふる亂れ髪
燃えてはめぐる血の汐(しほ)の
流れて踴(をど)る春の海
噴(は)く紅(くれなゐ)の光には
火炎(ほのほ)の氣息(いき)もあらだちて
深くも遠き嘶聲(いななき)は
大神(おほがみ)の住む梁(うつばり)の
塵(ちり)を動かす力あり
あゝ朝鳥(あさとり)の音をきゝて

富士の高根の雪に鳴き
夕つげわたる鳥の音に
木曽の御嶽(みたけ)の巖(いは)を越え
かの青雲(あをぐも)に嘶(いなな)きて
天(そら)より天(そら)の電影(いなづま)の
光の末に隠るべき
雄馬の身にてありながら
なさけもあつくなつかしき
主人(あるじ)のあとをとめくれば
箱根も遠し三井寺や
日も暖(あたたか)に花深く
さゝなみ青き湖の
岸の此彼(こちごち)草を行く
天の雄馬のすがたをば

誰かは思ひ誰か知る
しらずや人の天雲(あまぐも)に
歩むためしはあるものを
天馬の下(を)りて大土(おほつち)に
歩むためしのなからめや
見よ藤の葉の影深く
岸の若草香(か)にいでて
春花に醉ふ蝶(ちょう)の夢
そのかげを履(ふ)む雄馬には
一つの紅(あか)き春花(はるはな)に
見えざる神の宿(やどり)あり
一つうつろふ野の色に
つきせぬ天のうれひあり
嗚呼鷲鷹(わしたか)の飛ぶ道に

高く懸(かか)れる大空の
無限(むげん)の弦(つる)に觸れて鳴り
男神(をがみ) 女神(めがみ)に戯(たはむ)れて
照る日の影の雲に鳴き
空に流るゝ満潮(みちしほ)を
飲みつくすとも渇(かわ)くべき
天馬よ汝(なれ)が身を持ちて
鳥のきて啼(な)く鳰(にほ)の海
花橘(はなたちばな)の蔭を履(ふ)む
その姿こそ雄々しけれ

牝馬

青波深(あをなみ)きみづうみの
岸のほとりに生れてし
天の牝馬(めうま)は東(あづま)なる
かの陸奥(みちのく)の野に住めり
霜に霑(うるほ)ひ風に擦(す)れ
音(おと)もわびしき枯くさの
すゝき尾花にまねかれて
荒野(あれの)に嘆く牝馬かな
誰か燕(つばめ)の聲を聞き
たのしきうたを耳にして
日も暖かに花深き
西の空をば慕はざる
誰か秋鳴くかりがねの
かなしき歌に耳たてゝ

ふるさとさむき遠天(とほぞら)の
雲の行衞(ゆくへ)を慕はざる
白き羚羊(ひつじ)に見まほしく
透(す)きては深く柔軟(やはらか)き
眼(まなこ)の色のうるほひは
吾(わ)が古里(ふるさと)を忍べばか
蹄(ひづめ)も薄く肩痩(や)せて
四つの脚(あし)さへ細りゆき
その鬣(たてがみ)の艶(つや)なきは
荒野(あれの)の空に嘆けばか
春は名取(なとり)の若草や
病める力に石を引き
夏は國分(こくぶ)の嶺(みね)を越え

牝馬にあまる鹽を負ふ
秋は廣瀬の川添(かはぞひ)の
紅葉(もみぢ)の蔭にむちうたれ
冬は野末に日も暮れて
みぞれの道の泥に饑(う)ゆ
鶴よみそらの雲に飽き
朝の霞の香に醉ひて
春の光の空を飛ぶ
羽翼(つばさ)の色の嫉(ねた)きかな
獅子(しし)よさみしき野に隱れ
道なき森に驚きて
あけぼの露にふみ迷ふ
鋭き爪のこひしやな
鹿よ秋山(あきやまつまごひ)妻戀に

黄葉(もみぢ)のかげを踏み分けて
谷間の水に喘(あへ)ぎよる
眼睛(ひとみ)の色のやさしやな
人をつめたくあぢきなく
思ひとりしは幾歳(いくとせ)か
命を薄くあさましく
思ひ初(そ)めしは身を責むる
強き軛(くびき)に嘆き侘(わ)び
花に涙をそゝぐより
悲しいかなや春の野に
湧(わ)ける泉を飲み干すも
天の牝馬のかぎりなき
渇ける口をなにかせむ
悲しいかなや行く水の

岸の柳の樹の蔭の
かの新草(にひぐさ)の多くとも
饑ゑたる喉(のど)をいかにせむ
身は塵埃(ちりひぢ)の八重葎(やへむぐら)
ゑげれる宿にうまるれど
かなしや地(つち)の青草は
その慰藉(なぐさめ)にあらじかし
あゝ天雲(あまぐも)や天雲や
塵(ちり)の是世(このよ)にこれやこの
轡(くつわ)も折れよ世も捨てよ
狂ひもいでよ軛(くびき)さへ
噛み碎けとぞ祈るなる
牝馬のこゝろ哀(あはれ)なり
盡きせぬ草のありといふ

天つみそらの慕はしや
渇かぬ水の湧くといふ
天の泉のなつかしや
せまき厩(うまや)を捨てはてて
空を行くべき馬の身の
心ばかりははやれども
病みては零(お)つる泪(なみだ)のみ
草に生れて草に泣く
姿やさしき天の馬
うき世のものにことならで
消ゆる命のもろきかな
散りてはかなき柳葉(やなぎは)の
そのすがたにも似たりけり
波に消え行く淡雪(あはゆき)の

そのすがたにも似たりけり
げに世の常の馬ならば
かくばかりなる悲嘆(かなしみ)に
身の苦悶(わづらひ)を恨(うら)み侘び
聲ふりあげて嘶(いなな)かん
亂れて長き鬣(たてがみ)の
この世かの世の別れにも
心ばかりは靜和(しづか)なる
深く悲しき聲きければ
あゝ幽遠(かすか)なる氣息(ためいき)に
天のうれひを紫の
野末の花に吹き殘す
世の名殘こそはかなけれ

哀歌

中野逍遙をいたむ

秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴臺舊譜壚前柳、
風流銷盡二千年、これ中野逍遙が秋怨十絶の一なり。
逍遙字は威卿、小字重太郎、豫州宇和島の人なりといふ。
文科大學の異材なりしが年僅かに二十七にしてうせぬ。
逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の餘唾にあらざるはなし。
左に掲ぐるはかれの清怨を写せしもの、寄語殘月休長嘆、我
輩亦是艶生涯、合せかゝげてこの秀才を追慕するのこゝろを
とゞむ。

思君十首

中野逍遙

思君我心傷　思君我容瘁
中夜坐松蔭　露華多似涙

思君我心悄　思君我腸裂
昨夜涕涙流　今朝盡成血

示君錦字詩　寄君鴻文冊
忽覺筆端香　窗外梅花白

爲君調綺羅　爲君築金屋
中有鴛鴦圖　長春夢百祿

贈君名香篋　應記韓壽恩
休將秋扇掩　明月照眉痕

贈君双臂環　寶玉價千金
一鐫不乖約　一題勿變心

訪君過臺下　清宵琴響搖
佇門不敢入　恐亂月前調

千里囀金鶯　春風吹綠野
忽發頭屋桃　似君三兩朶

嬌影三分月　芳花一朶梅
渾把花月秀　作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く
水になき名をゑるすとて
今はた殘る歌反古(うたほご)の
ながき愁(うれ)ひをいかにせむ

かなしいかなやする墨(すみ)の
いろに染めてし花の木の
君がゑらべの歌の音に
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前(さき)の世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ

光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に
生れいでたる身を持ちて
友の契(ちぎ)りも結ばずに
君は早くもゆけるかな

すゞしき眼(まなこ)つゆを帶び
葡萄(ぶどう)のたまとまがふまで
その面影をつたへては
あまりに妬(ねた)き姿かな

同じ時世(ときよ)に生れきて
同じいのちのあさぼらけ

君からくれなゐの花は散り
われ命あり八重葎(やへむぐら)

かなしいかなやうるはしく
さきそめにける花を見よ
いかなればかくとゞまらで
待たで散るらんさける間(ま)も

かなしいかなやうるはしき
なさけもこひの花を見よ
いと〳〵清きそのこひは
消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども

いな花よりもさらに花
君しこひとにあらねども
いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に
あまりに惜しき才(さへ)なれば
病(やまひ)に塵(ちり)に悲(かなしみ)に
死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの
ことばの海のみなれ棹(ざを)
磯にくだくる高潮(たかじほ)の
うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の
きづなも捨てて嘶(いなな)けば
つきせぬ草に秋は來て
聲も悲しき天の馬

かなしいかなや音(ね)を遠み
流るゝ水の岸にさく
ひとつの花に照らされて
飄(ひるがへ)り行く一葉(ひとはふね)舟

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の
月のかげよりふるゑぐれかな

きみがはかばに
きゞくあり
きみがはかばに
さかきあり

くさはにつゆは
ゑげくして
おもからずやは
そのゑるし

いつかねむりを
　　さめいでて
いつかへりこん
　　わがはゝよ

紅羅（あから）ひく子も
　　ますらをも
みなちりひぢと
　　なるものを

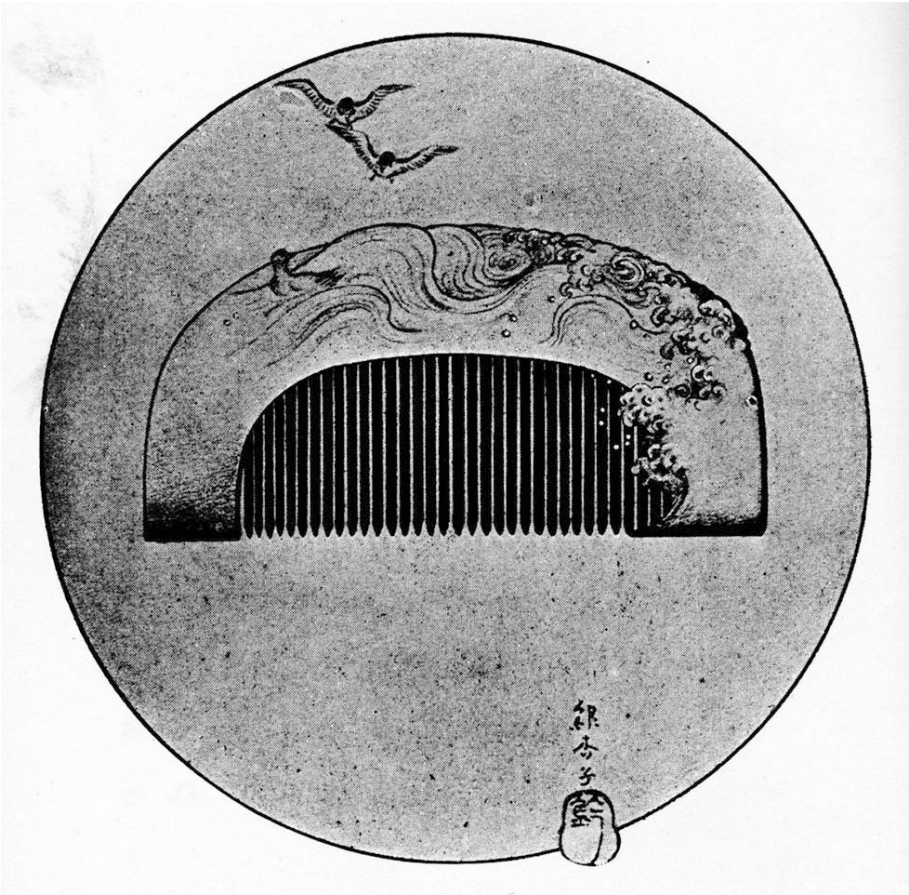
あゝさめたまふ
　　ことなかれ
あゝかへりくる

ことなかれ
はるはたなさき
はなちりて
きみがはかばに
かゝるとも
なつはみだるゝ
ほたるびの
きみがはかばに
とべるとも
あきはさみしき
あきさめの

きみがはかばに
　　そゝぐとも
ふゆはましろに
　　ゆきじもの
きみがはかばに
　　こほるとも
とほきねむりの
　　ゆめまくら
おそるゝなかれ
　　わがはゝよ

梭(をさ)の音(ね)

梭の音を聞くべき人は今いづこ
心を絲により初(そ)めて
涙ににじむ木綿(もめん)縞
やぶれし窗(まど)に身をなげて
暮れ行く空をながむれば
ねぐらに急ぐ村烏(むらがらす)
連(つれ)にはなれて飛ぶ一羽
あとを慕ふてかあ〳〵と


銀香子

かもめ

波に生れて波に死ぬ
情(なさけ)の海のかもめどり
戀の激浪(おほなみ)たちさわぎ
夢むすぶべきひまもなし

闇(くら)き潮(うしほ)の驚きて
流れて歸るわだつみの
鳥の行衞(ゆくへ)も見えわかぬ
波にうきねのかもめどり

流　星

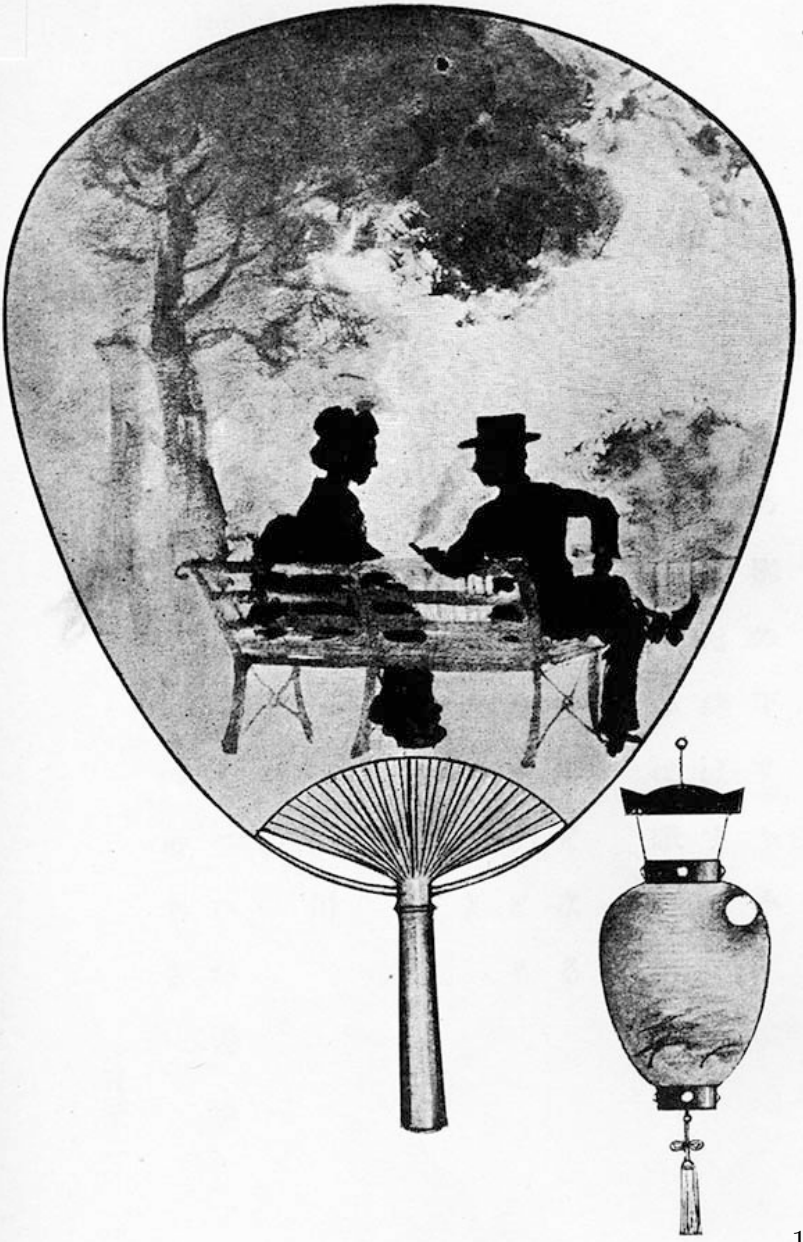
門(かど)にたち出(い)でたゞひとり
人待ち顔のさみしさに
ゆふべの空をながむれば
雲の宿りも捨てはてて
何かこひしき人の世に
流れて落つる星一つ

夏の夜

君と遊ばん夏の夜の
青葉の影の下すゞみ
短かき夢は結ばずも
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる
晝の愁(うれ)ひはたえずとも
星の光をかぞへ見よ
樂(たのし)みのかず夜(よ)は盡きじ

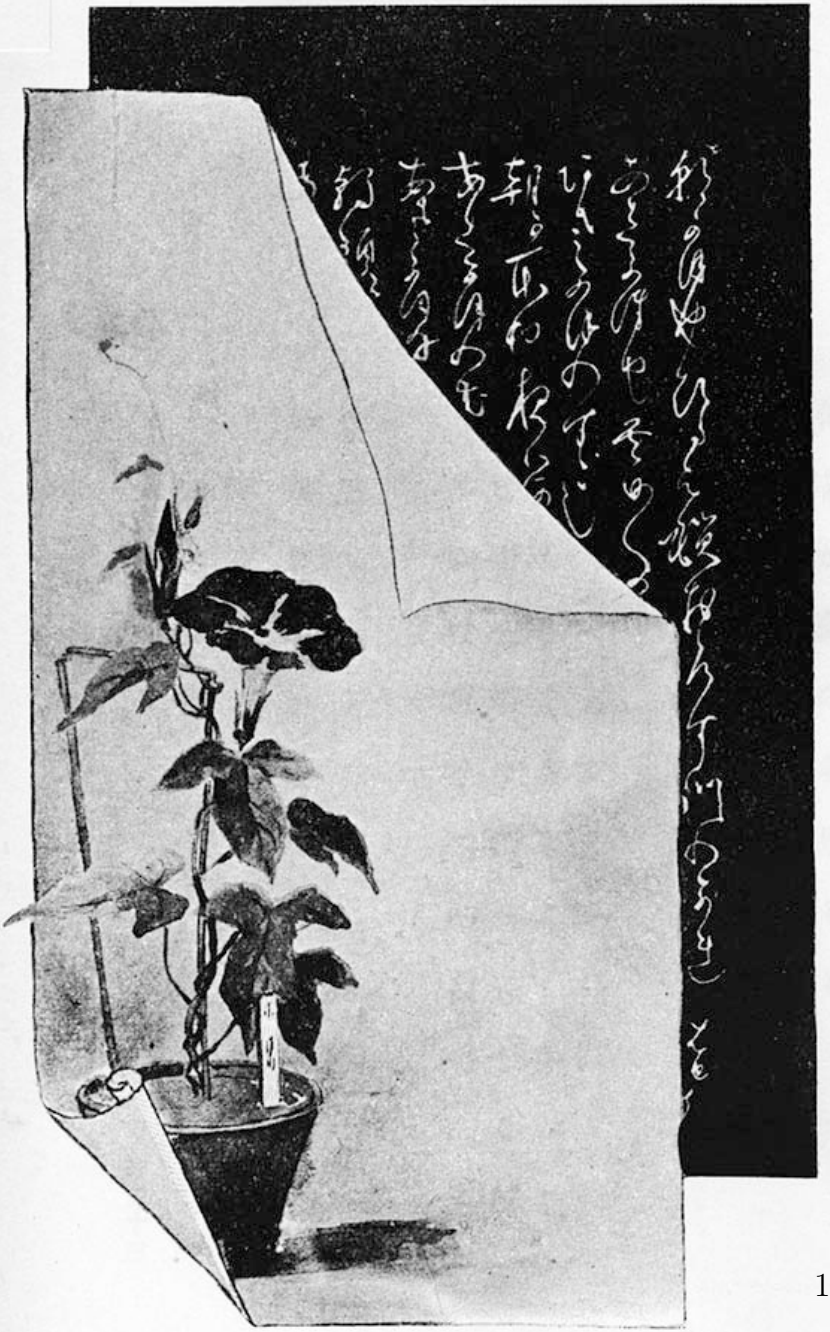
夢かうつゝか天(あま)の川(がは)



星に假寢の織姫の
ひゞきもすみてこひわたる
梭(をさ)の遠音(とほね)を聞かめやも

晝の夢

花橘(はなたちばな)の袖(そで)の香(か)の
みめうるはしきをとめごは
眞晝(まひる)に夢を見てしより
さめて忘るゝ夜のならひ
白日(まひる)の夢のなぞもかく
忘れがたくはありけるものか



ゆめと知りせばなまなかに
さめざらましを世に出(い)でて
うらわかぐさのうらわかみ
何をか夢の名残ぞと
問はゞ答へん目さめては
熱き涙のかわく間もなし

東西南北

男ごころをたとふれば
つよくもくさをふくかぜか
もとよりかぜのみにしあれば
きのふは東けふは西

女ごころをたとふれば
かぜにふかるゝくさなれや
もとよりくさのみにしあれば
きのふは南けふは北

懐古

天の河原にやほよろづ
ちよろづ神のかんつどひ
つどひいませしあめつちの
始のときを誰か知る

それ大神の天雲の
八重かきわけて行くごとく
野の鳥ぞ啼く東路の
碓氷の山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき

吾妻(あがつま)はやとこひなきて
熱き涙をそゝぎてし
尊(みこと)の夢は跡も無し

大和(やまと)の國の高市(たかいち)の
雷山(いかづちやま)に御幸(みゆき)して
天雲(あまぐも)のへにいほりせる
御輦(くるま)のひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゞ波や
志賀の都は荒れにしと
むかしを思ふ歌人(うたひと)の
澄める怨(うらみ)をなにかせん

春は霞(かす)める高臺(たかどの)に
のぼりて見ればけぶり立つ
民のかまどのながめさへ
消えてあとなき雲に入る

冬はしぐるゝ九重(ここのへ)の
大宮内のともしびや
さむさは雪に凍る夜の
龍(たつ)のころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ
人の血汐(ちしほ)の流るとも
今はむなしきわだつみの

まん〳〵としてきはみなし

むかしはひろき關が原
つるぎに夢を爭へど
今は寂(さび)しき草のみぞ
ばう〳〵としてはてもなき

われ今(いま)秋の野にいでて
奥山(おくやま)高くのぼり行き
都のかたを眺むれば
あゝあゝ熱きなみだかな

秋のうた

秋は來(き)ぬ
　秋は來ぬ
一葉(ひとは)は花は露ありて
風のきて彈(ひ)く琴の音(ね)に
青き葡萄(ぶどう)は紫の
自然の酒とかはりけり

秋は來ぬ
　秋は來ぬ
おくれさきだつ秋草(あきぐさ)も
みな夕霜(ゆふじも)のおきどころ
笑ひの酒を悲みの

盃にこそつぐべけれ

秋は來ぬ

秋は來ぬ

くさきも紅葉（もみぢ）するものを

たれかは秋に醉はざらめ

智恵あり顔のさみしさに

君笛を吹けわれはうたはん

初戀

まだあげ初(そ)めし前髪(まへがみ)の
林檎(りんご)のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛(はなぐし)の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅(うすくれなゐ)の秋の實(み)に
人こひ初(そ)めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき戀の盃(さかづき)を
君が情(なさけ)に酌(く)みしかな

林檎畠の樹(こ)の下に
おのづからなる細道(ほそみち)は
誰(た)が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の
人なきときに夜(よる)いでて
秋の葡萄の樹の影に
ゑのびてぬすむつゆのふさ

戀は狐にあらねども
君は葡萄にあらねども
人ゑれずこそ忍びいで
君をぬすめる吾心

相思

髪を洗へば紫の
小草(をぐさ)のまへに色みえて
足をあぐれば花鳥(はなとり)の
われに随(したが)ふ風情(ふぜい)あり

目にながむれば彩雲(あやぐも)の
まきてはひらく繪巻物(えまきもの)
手にとる酒は美酒(うまざけ)の
若き愁(うれひ)をたゝふめり

耳をたつれば歌神(うたがみ)の
きたりて玉(たま)の簫(ふえ)を吹き
口をひらけばうたびとの
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

一得一失

君がこゝろは蟋蟀(こほろぎ)の
風にさそはれ鳴くごとく
朝影清(きよ)き花草(はなぐさ)に
惜(を)しき涙をそゝぐらむ

それかきならす玉琴(たまごと)の
一つの絲のさはりさへ
君がこゝろにかぎりなき
ふらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは觸れやすき
君が優しき心から
かくばかりなる吾(わが)こひに
觸れたまはぬぞ恨(うら)みなる

傘のうち

二人してさす一張の
傘に姿をつゝむとも
情の雨のふりしきり
かわく間もなきたもとかな

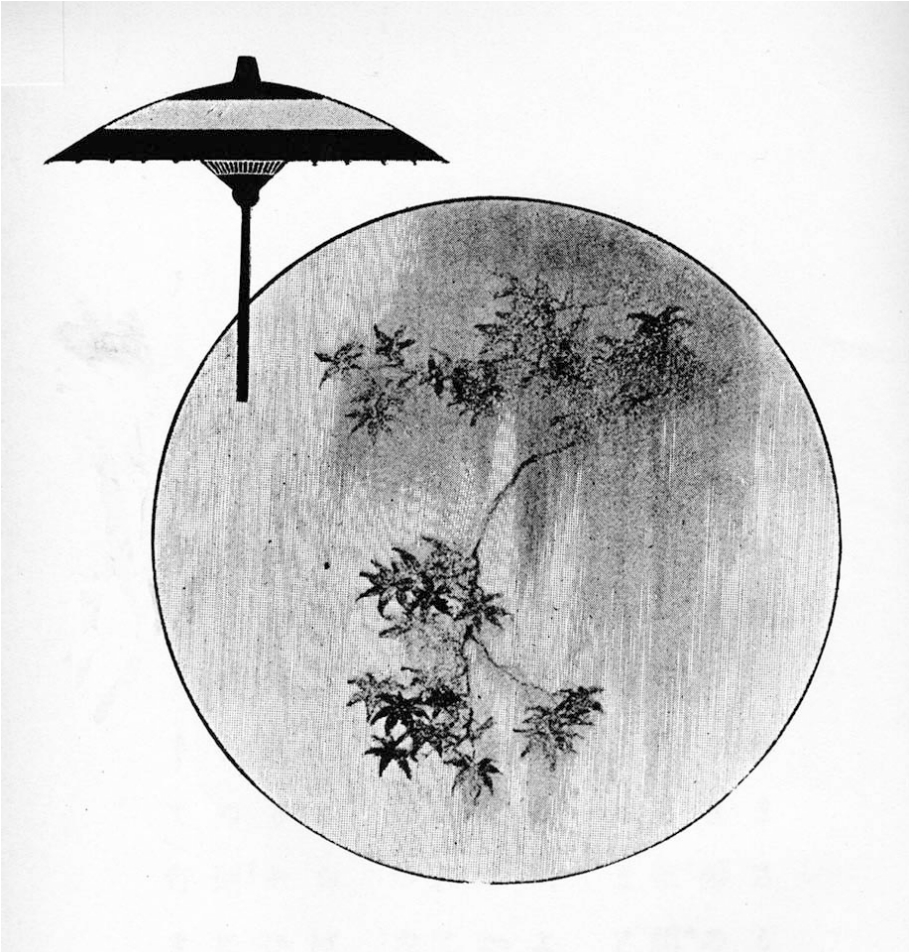
顔と顔とをうちよせて
あゆむとすればなつかしや
梅花の油黒髪の
亂れて匂ふ傘のうち

戀の一雨ぬれまさり
ぬれてこひしき夢の間や

染めてぞ燃ゆる紅絹(もみ)うらの
雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ
ゑばし情(なさけ)を捨てよかし
いづこも戯(たはふ)れて
それ忠兵衛の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ
秋の入日の照りそひて
傘の涙を乾(ほ)さぬ間(ま)に
手に手をとりて行きて歸らじ



忘にし

わが手に植えし白菊の
おのづからなる時くれば
一もと花の暮陰(ゆふぐれ)に
秋に隠(かく)れて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥(あきどり)の
聲にもれくる一ふしを
知るや君
深くも澄(す)める朝潮(あさじほ)の

底にかくるゝ眞珠(しらたま)を
知るや君

あやめもゑらぬやみの夜に
靜(しづか)にうごく星ぐつを
知るや君

まだ彈(ひ)きも見ぬをとめごの
胸にひそめる琴の音(ね)を
知るや君

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に
尾花みだれて秋かぜぞふく

ふづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲(しらくも)の
飛びて行くへも見ゆるかな

暮影(ゆふかげ)高く秋は黄の
桐(きり)の梢の琴の音(ね)に
そのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風(にしかぜ)吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉(うづら)巣に隠(かく)る

ふりさけ見れば青山(あをやま)も
色はもみぢに染めかへて
霜葉(しもは)をかへす秋風の
空(そら)の明鏡(かゞみ)にあらはれぬ

清(すず)しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉(ば)にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂蕩す秋風に
飄　り行く木の葉かな

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力　あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の

秋の百葉(もゝは)を落すとき

人は利劒(つるぎ)を振(ふる)へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世(ときよ)をのゝしるも
聲はたちまち滅(ほろ)ぶめり

高くも烈(はげ)し野も山も
息吹(いぶき)まどはす秋風よ
世をかれ〴〵となすまでは
吹きも休(や)むべきけはひなし

あゝうらさびし天地(あめつち)の
壺(つぼ)の中(うち)なる秋の日や

落葉と共に飄(ひるがへ)る
風の行衞(ゆくへ)を誰(たれ)か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠(しうかいだう)の花を分け
空ながむれば行く雲の
更(さら)に秘密(ひみつ)を闡(ひら)くかな

逃げ水

ゆふぐれゑづかに
　ゆめみんとて
よのわづらひより
　ゑばしのがる

きみよりほかには
　ゑるものなき
花かげにゆきて
　こひを泣きぬ

すぎこしゆめぢを
　おもひみるに

こひこそつみなれ

つみこそこひ

いのりもつとめも
　　このつみゆゑ
たのしきそのへと
　　われはゆかじ

なつかしき君と
　　てをたづさへ
くらき冥府(よみ)までも
　　かけりゆかん

月光

ゑづかにてらせる
　　月のひかりの
などか絶間なく
　　ものおもはする
さやけきそのかげ
　　こゑはなくとも
みるひとの胸に
　　忍び入るなり
なさけは説(と)くとも
　　なさけをゑらぬ
うきよのほかにも

朽(く)ちゆくわがみ
あかさぬおもひと
この月かげと
いづれか聲なき
いづれかなしき

强敵

一つの花に蝶と蜘蛛
小蜘蛛は花を守(まも)り顔
小蝶は花に醉ひ顔に
舞へども〳〵すべぞなき

花は小蜘蛛のためならば
小蝶の舞(まひ)をいかにせむ
花は小蝶のためならば
小蜘蛛の絲をいかにせむ

やがて一つの花散りて
小蜘蛛はそこに眠れども
羽翼(つばさ)も輕き小蝶こそ
いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をゑたへる男の山に登り
其女の家を望み見てうたへるうた

誰(たれ)かとゞめん旅人(たびびと)の
あすは雲間(くもま)に隠るゝを
誰か聞くらん旅人の
あすは別れと告げましを

清(きよ)き戀とや片(かた)し貝(がひ)
われのみものを思ふより
戀はあふれて濁(にご)るとも
君に涙をかけましを

人妻(ひとづま)戀ふる悲しさを
君がなさけに知りもせば
せめてはわれを罪人(つみびと)と
呼びたまふこそうれしけれ

あやめもゑらぬ憂(う)しや身は
くるしきこひの牢獄(ひとや)より
罪の鞭責(しもと)をのがれいで
こひて死なんと思ふなり

誰(たれ)かは花をたづねざる
誰かはいろに迷はざる
誰かは前にさける見て

花を摘(つ)まんと思はざる
戯(たはむ)るゝ
戀の花にも
嫉妬(ねたみ)の蝶の身ぞつらき
羽(はね)もをれ〳〵て
二つの
翼(つばさ)の色はあせにけり

人の命を春の夜の
夢といふこそうれしけれ
夢よりもいや〳〵深き
われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは
蓮(はす)さかばやと思ひわび

蓮の花さくころほひは
萩(はぎ)さかばやと思ふかな

待つまも早く秋はきて
わが蹈む道に萩さけど
濁(にご)りて持てる吾(わが)戀は
清き怨(うらみ)となりにけり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひしそのうた

いざゝらば
これをこの世のわかれぞと
のがれいでては住みなれし
御寺(みてら)の藏裏(くり)の白壁(しらかべ)の
眼にもふたゝび見ゆるかな

いざゝらば
住めば佛のやどりさへ
火炎(ほのほ)の宅(いへ)となるものを
なぐさめもなき心より
流れて落つる涙かな

いざゝらば
心の油濁るとも
ともしびたかくかきおこし
なさけは熱くもゆる火の
こひしき塵（ちり）にわれは燒けなむ

松島瑞巌寺に遊び葡萄栗鼠の木彫を觀て

舟路(ふなぢ)も遠し瑞巌寺
冬逍遙(ふゆじやうやう)のこゝろなく
古き扉に身をよせて
飛驒(ひだ)の名匠(たくみ)の浮彫(うきぼり)の
葡萄のかげにきて見れば
菩提(ぼだい)の寺の冬の日に
刀(かたなかな)悲しみ鑿(のみうれ)愁ふ
ほられて薄き葡萄葉の

影にかくるゝ栗鼠(きねづみ)よ
姿ばかりは隠すとも
かくすよしなし鑿(のみ)の香(か)は
うしほにひゞく磯寺(いそでら)の
かねにこの日の暮るゝとも
夕闇(ゆふやみ)かけてたゝずめば
こひしきやなぞ甚五郎

鶏（にはとり）

花によりそふ鶏の
夫（つま）よ妻鳥（めどり）よ燕子花（かきつばた）
いづれあやめとわきがたく
さも似つかしき風情（ふぜい）あり

姿やさしき牝鶏（めんどり）の
かたちを耻づるこゝろして
花に隠るゝありさまに
品かはりたる夫鳥（つまどり）や

雄々しくたけき雄鶏（おんどり）の
とさかの色も艶（つや）にして

黄なる口觜(くちばし) 脚蹴爪(あしけづめ)
尾はゑだり尾のなが〳〵し

問ふても見まし誰(た)がために
よそほひありく夫鳥(つまどり)よ
妻守(つまも)るためのかざりにと
いひたげなるぞいぢらしき

畫(ゑ)にこそかけれ花鳥(はなどり)の
それにも通ふ一つがひ
霜に侘寢(わびね)の朝ぼらけ
雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の

闇行く水に動くとき
日を迎へんと鶏の
夜の使(よるつかひ)を音(ね)にぞ鳴く

露けき朝の明けて行く
空のながめを誰(たれ)か知る
燃ゆるがごとき紅(くれなゐ)の
雲のゆくへを誰(たれ)か知る

闇もこれより隣なる
聲ふりあげて鳴くときは
ひとの長眠(ねむり)のみなめざめ
夜は日に通ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに
いざ妻鳥(つまどり)と巣を出(い)でて
餌(ゑ)をあさらんと野に行けば
あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏(とり)の音(ね)も高(たか)に
あしたの空に鳴き渡り
草かき分けて來るはなぞ
妻戀ふらしや妻鳥(つまどり)を

ねたしや露に羽(はね)ぬれて
朝日にうつる影見れば
雄鶏(をどり)に惜(を)しき白妙(しろたへ)の
雲をあざむくばかりなり

力あるらし聲たけき
敵(かたき)のさまを懼(おそ)れてか
聲色(いろ)あるさまに羞(は)ぢてかや
妻鳥(めどり)は花に隠れけり

かくと見るより堪へかねて
背をや高めし夫鳥(つまどり)は
羽(は)がきも荒く飛び走り
蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛(ふでげ)のさきも逆立(さかだ)ちて
血潮(ちしほ)にまじる眼のひかり
二つの鶏(とり)のすがたこそ
是(これ)おそろしき風情(ふぜい)なれ

妻鳥(めどり)は花を馳(か)け出でゝ
争闘(あらそひ)分くるひまもなみ
たがひに蹴合ふ蹴爪(けづめ)には

火焔(ほのほ)もちるとうたがはる

蹴るや左眼(さがん)の的(まと)それて
羽(はね)に血しほの夫鳥(つまどり)は
敵の右眼(うがん)をめざしつゝ
爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなゐの
血汐の花も地に染みて
二つの鶏(とり)の目もくるひ
たがひにひるむ風情なし

そこに聲あり涙あり
爭ひ狂ふ四つの羽(はね)

血潮(のり)に滑りし夫鳥(つまどり)の
あな仆(たふ)れけん聲高し

一聲長く悲鳴して
あとに仆るゝ夫鳥(つまどり)の
羽(はね)は血汐の朱(あけ)に染(そ)み
あたりにさける花紅(あか)し

あゝあゝ熱き涙かな
あるに甲斐なき妻鳥(めどり)は
せめて一聲鳴けかしと
屍(かばね)に嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの

いつか恐怖(おそれ)と變りきて
思ひ亂れて音(ね)をのみぞ
鳴くや妻鳥(めどり)の心なく

我を戀ふらし音(ね)にたてて
姿も色もなつかしき
花のかたちと思ひきや
かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶(ちょう)あるを
鳥に縁(えにし)のなからめや
おそろしきかな其の心
なつかしきかな其の情(なさけ)

紅(あけ)に染(そ)みたる草見れば
鳥の命のもろきかな
火よりも燃ゆる戀見れば
敵(てき)のこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の
照る日も雲に薄らぎて
花に色なく風吹けば
野はさびしくも變りけり

かなしこひしの夫鳥(つまどり)の
冷えまさりゆく其姿(その)
たよりと思ふ一ふしの
いづれ妻鳥(めどり)の身の末ぞ

恐怖(おそれ)を抱く母と子が
よりそふごとくかの敵に
なにとはなしに身をよする
妻鳥(めどり)のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな
さきの樂しき花ちりて
空色暗く一彩毛(ひとはけ)の
雲にかなしき野のけしき

行きてかへらぬ鳥はいざ
夫(つま)か妻鳥(めどり)か燕子花(かきつばた)
いづれあやめを蹈み分けて

野末を歸る二羽の鶏（とり）

深林の逍遙

力を刻(きざ)む木匠(こだくみ)の
うちふる斧のあとを絶え
春の草花彫刻(くさばなほりもの)の
鑿(のみ)の韻(にほひ)もとゞめじな
いろさま〻〵の春の葉に
青一筆(あをひとふで)の痕(あと)もなく
千枝(ち え)にわかるゝ赤樟(あかくす)も
おのづからなるすがたのみ
檜(ひのき)は荒し杉直し
五葉は黒し椎(しひ)の木の
枝をまじゆる白樫(しらかし)や
樗(あふち)は莖をよこたへて

枝と枝とにもゆる火の
なかにやさしき若楓（わかかへで）

山　精

ひとにしられぬ
たのしみの
ふかきはやしを
たれかしる

ひとにしられぬ
はるのひの
かすみのおくを
たれかしる

木　精

はなのむらさき
はのみどり
うらわかぐさの
のべのいと

たくみをつくす
大機(おほはた)の
梭(をさ)のはやしに
きたれかし

山　精

かのもえいづる
くさをふみ

かのわきいづる
みづをのみ

かのあたらしき
はなにゑひ
はるのおもひの
なからずや

木　精

ふるきころもを
ぬぎすてて
はるのかすみを
まとへかし

なくうぐひすの
ねにいでて
ふかきはやしに
うたへかし

あゆめば蘭(らん)の花を蹈み
ゆけば楊梅(やまもゝ)袖に散り
袂(たもと)にまとふ山葛(やまくづ)の
葛のうら葉をかへしては
女蘿(ひかげ)の蔭のやまいちご
色よき實こそ落ちにけれ
岡やまつゞき隈々(くまぐま)も
いとなだらかに行き延(の)びて
ふかきはやしの谷あひに

亂れてにほふふぢばかま
谷に花さき谷にちり
人にしられず朽(く)つるめり
せまりて暗き峽(はざま)より
やゝひらけたる深山木(みやまぎ)の
春は木枝(こえだ)のたゝずまひ
ゑげりて廣き熊笹の
葉末をふかくかきわけて
谷のかなたにきて見れば
いづくに行くか滝川よ
聲もさびしや白絲の
青き巖(いはほ)に流れ落ち
若き猿(ましら)のためにだに
音(おと)をとゞむる時ぞなき

山　精

ゆふぐれかよふ
たびゞとの
むねのおもひを
たれかしる

友にもあらぬ
やまかはの
はるのこゝろを
たれかしる

木　精

夜をなきあかす

かなしみの
まくらにつたふ
なみだこそ

ふかきはやしの
たにかげの
そこにながるゝ
しづくなれ

山　精

鹿はたほるゝ
たびごとに
妻こふこひに
かへるなり

のやまは枯るゝ
たびごとに
ちとせのはるに
かへるなり

木　精

ふるきおちばを
やはらかき
青葉のかげに
葬れよ

ふゆのゆめぢを
さめいでて

はるのはやしに
きたれかし

今しもわたる深山(みやま)かぜ
春はしづかに吹きかよふ
林の簫(しょう)の音(ね)をきけば
風のしらべにさそはれて
みれどもあかぬ白妙(しろたへ)の
雲の羽袖(はそで)の深山木の
千枝(ちえだ)にかゝりたちはなれ
わかれ舞ひゆくすがたかな
樹々(きぎ)をわたりて行く雲の
ゑばしと見ればあともなき
高き行衛(ゆくへ)にいざなはれ

千々にめぐれる巌影(いはかげ)の
花にも迷ひ石に倚(よ)り
流るゝ水の音(ね)をきけば
山は危ふく石わかれ
削(けづ)りてなせる青巌(あをいは)に
碎けて落つる飛潭(たきみづ)の
湧きくる波の瀬を早み
花やかにさす春の日の
光烱(ひかり)照りそふ水けふり
獨り苔(こけ)むす岩を攀(よ)ぢ
ふるふあゆみをふみしめて
浮べる雲をうかゞへば
下にとゞろく飛潭(たきみづ)の
澄むいとまなき岩波は

落ちていづくに下るらん

山　精

なにをいざよふ
むらさきの
ふかきはやしの
はるがすみ

なにかこひしき
いはかげを
ながれていづる
いづみがは

木　精

かくれてうたふ
野の山の
こゑなきこゑを
きくやきみ

つゝむにあまる
はなかげの
水のしらべを
しるやきみ

山　精

あゝながれつゝ
こがれつゝ
うつりゆきつゝ

うごきつゝ

あゝめぐりつゝ
かへりつゝ
うちわらひつゝ
むせびつゝ

木　精

いまひのひかり
はるがすみ
いまはなぐもり
はるのあめ

あゝあゝはなの

つゆに醉ひ
ふかきはやしに
うたへかし

ゆびをりくればいつたびも
かはれる雲をながむるに
白きは黄なりなにをかも
もつ筆にせむ色彩(いろあや)の
いつしか淡く茶を帯びて
雲くれなゐとかはりけり
あゝゆふまぐれわれひとり
たどる林もひらけきて
いと靜かなる湖の
岸邊にさける花躑躅(はなつつじ)

うき雲ゆけばかげ見えて
水に沈める春の日や
それ紅（くれなゐ）の色染めて
雲紫（むらさき）となりぬれば
かげさへあかき水鳥の
春のみづうみ岸の草
深き林や花つゝじ
迷ふひとりのわがみだに
深紫（ふかむらさき）の紅（くれなゐ）の
彩（あや）にうつろふ夕まぐれ

若菜集

畢

十六